

研究ノート

葬式仏教再考

—— 島田裕巳氏の批判を受けて ——

岩田親静

一、問題の所在

島田裕巳『葬式は、いらぬ』(幻冬舎新書)が売れている。約三十万部を売り上げ、続編として『戒名は、自分で決める』(幻冬舎新書)、『坊さんは葬式などあげなかつた』(朝日文庫)といった本も出版されている。

一方で、島田氏の主張を否定し、葬儀・葬式は必要であるという主張をする一条真也『葬式は必要!』(双葉新書) 橋爪謙一郎『お父さん「葬式はいらぬ」って言わないで』(小学館101新書)といった本も出版されており、今、葬儀・葬式に関しての問題は、世間に注目されている。

ユリウス・カエサルという言葉に「人間ならば誰でも、現実のすべてが見えるわけではない。多くの人は見たいと欲する現実しか見ない」という言葉があるが、これらの問題も同様ではないだろうか。三十万部が売れたという現実は、現実として受け入れ、それにどう対応するのが問題であろう。ここでは一端、信仰的考え方や成仏論を封印して、世間目線に立って考えてみる必要があるように思われる。

島田裕巳氏の批判もくだらない、間違っていると無視するのでなく、正しい批判であるならば受け入れ、改革すべ

きところは改革するべきではないだろうか。

そこで本論では、まず葬儀に関して書かれた近年の諸論（拙者の管見が及ぶ範囲であるが）中に示された葬儀がなぜ不要といわれるのか、その理由を確認したい。同時に葬儀を行う（現代的なものも含む）意義についても確認してみる必要がある。

次に近年の葬式仏教批判の特徴を、求められる葬儀の形等を確認し、現場においてどのように対応するべきなのかを検討してみたい。

二、葬儀不要論の理由

資料①

島田裕巳『葬式は、いらない』（幻冬舎新書 四・五頁）

実際に葬式をあげた後、私たちは本当にこれでよかったのかと考えることが少なくない。葬儀業者は親切で、丁寧に式をリードしてくれたし、実際すべてはつつがなく終了した。

だが、そこにはかなりの金額がかかった。果たして、それに見合うだけの葬式だったのか。それで本人を引ったことになるのか。考えはじめると、わからなくなる。

資料②

島田裕巳『葬式は、いらない』（幻冬舎新書 一八三頁）

一人の人間が生きたということは、さまざまな人間と関係を結んだということである。葬式には、その関係を再確認する機能がある。その機能が十分に発揮される葬式が、何よりも一番好ましい葬式なのかもしれない。そんな葬式なら誰もがあげてみたいと思うに違いない。

最後まで生き切り、本人にも遺族にも悔いを残さない。私たちが目指すのはそういう生き方であり、死に方である。それが実現されるなら、もう葬式がどのような形のものでも関係がない。生き方とその延長線上にある死に方が、自ずと葬式を無用なものにするのである。

資料③

一条真也『葬式は必要!』（双葉新書 六三二・六四頁）

現在、家族葬、密葬から、葬式をせずに直行するという直葬がふえてきています。その背景にはいろいろな原因があるのでしようが、最大の要因は、葬祭業界に限らず日本社会全体が「無縁社会」になってきているということだと思います。

この「無縁社会」というのは、NHKスペシャルで二〇一〇年一月三十一日に放映された番組のタイトルですが、大変な反響を呼びました。いま一年間に三万二〇〇〇人もの人たちが無縁死されているといわれています。

無縁社会も、葬式無用論も、その背景は同じだと思います。

それはコミュニティが崩壊しつつあるということ、そして人間関係が希薄化してきているということです。

以前の人間関係というのは、血縁、地縁、学縁があり、職縁もありました。いま、そのすべてが希薄になっています。

資料①で島田氏は葬儀費用が高い（全国平均が二百三十一万円であること）を問題視している。資料②では、理想の葬儀とは人間関係の再確認する機会でもあるとしつつも、本人が最後まで生き切れば、葬式おのずから不要になると考えている。この点は「週刊現代 六月二十六日号」大特集「私の死に方」でも島田氏のように述べている。

「死んだ人が生きている人をしばる行為自体をやめるべきだと僕は考えています。だから、僕は、自分が死んだ後に

葬儀をどうやって欲しいか、何も希望はありません。」として死後のことは遺族に任せるべきとしていることと底通している。葬儀が人間関係の確認のためにあるとしつつも、死後の関係性よりも現在の達成感を重視する考えと言えよう。

資料③では、人間関係の希薄化を問題としており、本年の中央教化研究会議のテーマである「無縁社会」との共通性を指摘しています。

これらの資料から、費用の高騰、個人主義、無縁化の問題が、葬儀を不要とする理由となっていることが見えてくる。

三、葬儀を行う意義

資料④

一条真也『葬式は必要!』（双葉新書 一四三頁）

葬儀は悲しみを発露し、しかも何かしらそこから力を得る場でもあります。弔うというのは、死者を悼み、また家族を慰めることですが、それも一定の型のある時間にこそ瞬発しやすいものです。

資料⑤

橋爪謙一郎『お父さん「葬式はいらない」って言わないで』（小学館101新書 六七頁）

「故人を偲び、故人に対する悲しみや感謝の気持ちを表す場」は、新たな充実した日々を送るためのファーストステップとなるのだ。これが葬儀の最大の意味である。

ところが今は葬儀の形骸化によって、そういった本質的な部分が忘れられている。だから「葬儀なんかしなくていい」という短絡的な結論になってしまうのだ。

しかしこの場面がないと、前向きに生きる新しい自分が作れない。あるいは生きる意味や生きがいがわからなくなるのだ。

資料⑥

橋爪謙一郎『お父さん「葬式はいらないうって言わないで』（小学館101新書 六七頁）

葬儀には「儀礼」や「しきたり」がつきものである。わずらわしく感じる人も多いだろうが、それなりの機能があった。

たとえば初七日、四十九日に始まり、百か日、一周忌、三回忌と行われる法要がある。都合をつけて親族が集まって供養をする。故人の冥福を祈り、霊を慰めるために営まれるのだが、遺族を支える場でもある。

家族が減って新しい環境のなかで暮らしている遺族は、寂しい思いや心細さを抱えている。定期的に親族が集まることは、その不安な気持ちの支えになるものだ。

資料⑦

影山教俊『寺と仏教の大改革』（国書刊行会 一四五頁）

仏教は釈尊の時代から現在にいたるまで、またインドでも中国でも日本でも、すべて生きている人のために教えが説かれ、死を目前にした人に經典を読む「臨終勤行」の作法はあるとしても、死者のために読むお経などは存在しない。追善供養も「故人を敬い尊敬する行為」に転じていくための手段だったのである。

（中略）

この現実苦から目を背けずに、克服すべき道を切り開き、死を受け入れたとき、死を抱えて生きることができるようになる。こうした生き方に気づくチャンスとして葬儀が執り行われるわけであり、じつは葬式法要も生きていく人びとのための儀式ということである。

資料⑧

高橋卓志『寺よ、変われ』（岩波新書 一八三頁）

葬儀とは、故人の生き方がプログラムの中心に据えられ、故人と故人を身近で見守った家族が、ともに主役となって執行されるのが理想だと思う。死は、その人の生の延長線上にあるものであり、生き方と同様に別れ方も、個性として尊重されなければならない。そうだとしたら、必然的に、丁寧に、そして手間をかけた、オリジナルな別の儀式になっていくはずなのだ。

資料④では葬儀を悲しみを発露し、そこから力を得るとしている。具体的には、死者供養と家族を慰めることであるとしている。

資料⑤⑥では故人に対する悲しみや感謝、遺族を支える場としての葬儀があるとしている。（グリーン・ケア（悲嘆援助）、グリーン・ワーク（喪の作業）としての葬儀とも言えようか。）

資料⑦では死苦を超克するための行為として葬儀を位置づけている。グリーン・ワークの最終段階、立ち直りや再生の段階を意味しているとも言える。

資料⑧は葬儀を通して死者の意思（リビング・ウィル）を尊重することで、グリーン・ワークを行おうとするものである。

資料⑦⑧の指摘は、仏陀の遺言ともいうべき「自灯明、法灯明」の考えともかかわってこよう。仏陀は故人（仏陀自身）の教え、生き方を指標としつつ、弟子自身の意思で歩き出すことを求めている。死を引き受け、死を超越することを求めているとも言えよう。

四、寺院への批判・提言の確認

葬式批判・提言に関しては、①檀家制度との兼ね合い（経済的問題）②戒名の問題の二つの点に集約することが可能であろう。

①檀家制度との兼ね合い（含む経済的問題）

資料⑨

島田裕巳『葬式は、いらぬ』（幻冬舎新書 百三十六・百三十七頁）

檀家になるということは、自分の家の死者を吊ってもらう檀那寺を持つということである。寺の住職は、毎日勤めをし、本尊の前で読経などを行う。その際には、寺の檀家になっている故人たちの冥福を祈る。檀家になることで、私たちは先祖の供養を委託しているのである。

寺における毎日の勤めのなかで、供養の対象になるのは檀家の先祖の霊だけで、そこに属していない人間の霊は対象にならない。その点で、檀那寺を持ち、供養を委託できるということは特権的なことである。

（中略）

その特権を護るためには、それ相応の負担をしなければならない。それは、当たり前の話である。ところが、こうしたことを明確に意識もしていなければ、自覚もしていない。いないがゆえに、高額の戒名料を支払わなければならなくなると、強い不満を感じ、寺や住職を批判する。本当にそれでいいのか、檀家側もその点について考え直してみる必要がある。私たちは贅沢を享受しながら、その自覚が十分でないのである。

仏教界がなすべきことは、檀家になることの意味を明確にし、それを檀家にも伝えることである。そうした試みがなされるならば、葬式仏教や戒名のあり方に対する批判も、これまでとは違ったものになってくるだろう。

資料⑩

村井幸三『お坊さんが隠すお寺の話』（新潮新書 一七四頁）

檀家制度をやめて、会費制、加入退会自由の護持会システムに代えるのです。若い世代の各家族は、国許の実家がいかに檀家の名を押しつけられて経済的に苦勞したか身にしみています。そのところを見誤らないでください。寺と庶民がお互いの立場を尊重しあいながら、自然と解け合っていく。そして時には「生きてよかったなア」とやすらぎをさりげなく感じさせる。そんな仲立ちが出来たら素晴らしい仏教再生の第一歩になるのではないのでしょうか。

資料⑪

影山教俊『寺と仏教の大改革』（国書刊行会 一四五頁）

現在、日本の寺院数はおよそ八万か寺、僧侶の数は三〇万人というが、八万か寺の住職の中で寺で行われる葬儀法要だけで自立できるのは、わずかに約三割程度である。（中略）いずれにしても、住職の多くはどこかで別の収入源を模索しなければ立ちいかないのが、この世界の現実である。

ならば一度、現代仏教の僧侶は商品化した葬儀法要を離れて、ボランティアとして葬儀法要を営んだらどうだろう。（中略）

ボランティアとして僧侶が葬儀法要を行えば、たしかに経済的には立ちいかなくなるだろうが、世間の宗教ごとに寄せる気分が葬儀法要の商品化から切り離されれば、葬儀法要はそのまま宗教ごととして社会化するはずである。

もう寺院社会を存続させるための葬儀法要の商品化から離れて、宗教ごととして寺院運営へと切り替えるべき時期に来ているはずだ。

資料⑨は檀家にとっても制度の説明の必要性を指摘している。檀家は特権的立場であり、そのためにはそれ相応の負担がかかるのが当然であるとし、その負担の中に戒名料があるとしているのである。

資料⑩檀家制度による負担を問題にしていますが、この問題の前提として住職の資質が問題とされている。「国民の仏教への評価の下落、ひいては葬儀からの寺離れは失礼ですが住職の資質に依るところが極めて重いのです。国民を導く立場でありながら、その期待に応えず、むしろ国民の気持ちを逆なでするような行動を平然とされている住職が少なくありません。聖職者である自覚だけでなく、変わる社会への理解のなさ、教養の低さも気になります。」（一七二頁）

負担に相応するだけの行動や「変わる社会への理解のなさ、教養の低さ」といったものが問題、不満となり「会費制、加入退会自由の護持会システム」の導入を提言することになっている。

資料⑪は葬儀法要が宗教ごとでなくなったのは、商品化したためであるとしている、経済的リスクを背負っても、仏教が生き残るためには、葬儀をボランティア化すべきとの提言である。

三つの指摘ともに妥当であるが、資料⑪の場合は既存の寺院はほとんど生き残ることは不可能になる。寺院をどう維持するのかということが問題になってくる。また布施の概念がなくなってしまう。法施に対する財施という考え方もなくなってしまう。この場合むしろ「お気持ちで」よいとする方が妥当ではないだろうか。

資料⑨の説明責任、資料⑩につながる住職の資質の問題は、解決できる問題ではある。

② 戒名の問題

資料⑫

二村祐輔『自分らしい逝き方』（新潮新書 九八・九九頁）

私自身、葬儀の場面に何度となく立ち会ってきましたが、お坊さんが戒名について法話をすることがあっても、

内容は命名された経緯やその文字の解説というのがほとんどです。「亡くなったときになぜ戒名をつけるのか」というそもその由来について語る人に会ったことがあります。これでは、名前一つに対していくら支払ったと喪主が感じるのも無理からぬことです。これからの時代、それではやっていけません。私たちの葬儀に対する感覚もお坊さんの存在意義も、本来の価値観から遠く離れてしまいました。もう一度原点に立ち戻り、その上で新しい方法を模索する必要があると強く感じています。

そのためにも、まずは僧侶の側が、戒名授与について丁寧に説明すべきです。先祖供養に対する日本人としての意識を再確認させることが先決です。お布施⇨戒名料というとらえ方をあらためさせるために、お布施と戒名料は明確に違うものであること、もともとの意味はどういうものかということを知らしめ、それを踏まえたうえでどうするとよいか、意見を述べて相手に考えさせるのです。

資料⑬

島田裕巳『戒名は、自分で決める』（幻冬舎新書 一七八・一七九頁）

戒名の制度やシステムに大きな問題があることは否定できない事実で、一般の人たちはそれにまったく納得していない。そして、仏教界の説明も、決して十分な説得力をもってはいない。

（中略）

仏教界にまず必要なことは、戒名とは何かについて、とってつけたような説明をするのではなく、現実に即した説明をすることである。

日本の戒名は、出家、得度した僧侶に与えられる僧名とはまるで性格が違う。それは世俗の世界を離れた証ではなく、あくまで死者の名前である。

したがって、生前に授かるのが本来のあり方ではなく、死後授かるべきものである。在家の立場にある一般の

人々が、生前に戒名を授かるのは、むしろおかしい。出家、得度していないのに名前を改める必要などどこにもないのだ。

そして、戒名料を、布施として説明するのではなく、はっきりと檀家としての経済的な負担を求めるものとして説明する必要がある。檀家であることの意味を説き、菩提寺を維持するには、檀家が一定の経済的な負担をする必要があるのを明確にし、その上で金をとるべきだ。

さらに、経済的な貢献の度合いによって、戒名にランクをつけるというやり方も改めていく必要がある。戒名が死者の名前で、生前の功績や人柄を表現するものであるなら、すべて院号のついた戒名にしたらいいのではないだろうか。

また、それぞれの宗派では、寺壇関係が成立していないときに、戒名料をとるというやり方をしないよう、所属する寺の住職に指導するべきであろう。寺壇関係がないなら、葬式の導師をつとめたことの対価のなかに、戒名をつける費用も含めるべきだ。

資料⑭

ぶんまお著 末木文美士編『ボクの哲学モドキⅡ』二二九・二三〇頁

坊さんを見てみると、死者の上に立つかのように、傲慢です。特に悪いのは戒名というやつです。あれはなくてはなりません。（中略）戒名は、受戒して仏弟子になるための名前だといわれます。でも、もともとは恐らく、死者を生者の世界と異なる死者の世界に送り出し、生者と違うことを自覚させるためという役割が大きかったと思われま

す。でも、今の時代はそんな必要はないでしょう。死後の名前は、死後、それこそ阿弥陀様にでも会えば、阿弥陀様がつとよい名前をつけてくれるでしょう。生臭坊主がつけるべきものではありません。授戒が必要としても、阿弥陀様から直接授戒するほうがよっぽどよいでしょう。まして、お金によって戒名に差別があるなんて、とんで

もないことです。

資料⑮

鳥田裕巳『戒名は、自分で決める』（幻冬舎新書 一二二頁）

現代では、故人のことをまったく、葬儀の導師を依頼しただけの僧侶が故人を知るはずもない。

そうした僧侶が戒名を授ける際に、遺族から生前の仕事や人柄などについて情報を集め、それをもとに戒名で使われる字が決められることになるであろう。だが、それだけの情報では、生前の故人を彷彿とさせる戒名をつけることはむずかしい。

資料⑫は戒名授与の理由を説明すべきとの指摘である。同時に戒名料を肯定しているのが特徴的です。

資料⑬は現在の戒名は死後の名前であり、「檀家としての経済的な負担を求めるもの」であると指摘しています。その上で、寺壇関係が成立していないならば、戒名料を求めるべきでないとしている。

資料⑭は戒名を「死者を生者の世界と異なる死者の世界に送り出し、生者と違うことを自覚させるため」のものであるとし、今となっては必要ないとしています。その上で、「お金によって戒名に差別があるなんて、とんでもないこと」であると言っています。

資料⑮⑯ともに問題にしているのが、僧侶が戒名を名付けることです。生臭坊主、生前の故人を知らない人間に名前をつけてもらう事の不信感とでも言えましょうか。

ここで私見を述べれば、本来戒名料などというものはあるべきではないことは、言うまでもありません。仏の慈悲にもとる行為にもなり兼ねません。しかし、寺院維持のためにはやむを得ない場合もあるかもしれません。そこで必要となるのが説明責任でありましょう。戒名のランクが、読むお経の差異につながったり、願う浄土が異なったり

するのではないこと、霊山往詣を願うものであること、故人の生前の功績や故人の家族の都合等に応じて戒名がさずけられるものであることを説明する必要があるように思われる。

その上で、世間では必ずしも坊さんでなくても戒名がつけられると考えるようになってきていることを理解すべきであろう。ただし、仏教者としての名前であるから、仏典、経文に基づいた名前をつけるのであり、生前の仕事や人柄を知ったからと言って良い戒名が付けられるとは限らないのであり、それ故に僧侶が戒名を授けるのだと考えるのはどうであろうか。故人の人柄を理解し、名前を付けるという行為ですからとすれば、コンピューターやマニュアルといった安直な方法で戒名を付けるべきではないであろう。故人の家族・親族には戒名の意味の説明をしっかりと行う必要があると思われる。僧侶の学識とたゆまぬ努力が求められている。

五、求められる葬儀の形とはなにか

資料⑬

高橋卓志『寺よ、変われ』（岩波新書 一八〇・一八一頁）

葬儀におけるリビング・ウイルについては、「私はこのような別れ方を希望する」、だから「遺された人々には、私の意志による別れを作り上げて欲しい」という葬儀執行方法の依頼と考えればいい。リビング・ウイルを重視した葬儀とは、人生の生き方は、人さまざまなのだから、死における別れの仕方もさまざまでいい、という意識と同時に、自分の生死にかかわる問題は、他人まかせではなく、自分自身の人生観や価値観に基づいて、納得できる選択をした、という考えに従うものである。

しかし、葬儀の場に故人のリビング・ウイルを反映するのはなかなか難しい。なぜなら、仏教による葬儀の場合、古来より、死者がホトケの弟子となり、この世の執着をはなれて「あの世」に赴くための、宗派伝来の厳粛な

儀式な儀式プログラムが存在している。

(中略)

このように、厳粛に勤められる仏教の伝統的葬儀は、死者に対する儀礼として、原理上は正しい。しかし死者儀礼に付随しなければならぬ。遺族の悲嘆の癒しが、この儀礼のみで完遂しているとは思えない。なぜなら、このような現行の葬儀の中では、遺族が故人の意思や生き方を受け止め、それを葬儀に反映させる場面がほとんど見当たらないからだ。

資料⑰

高橋卓志『寺よ、変われ』（岩波新書 一九八頁）

葬儀は坊さんの仕事だと思われているが、仕事量や内容については、それほど厳しいものだと思われてはいない。葬儀の席で経を誦み、引導を渡す場面しか人々は見えていないからそのような印象をもつ。しかし、やろうと思えば限りなく仕事は増え、厳しさは増す。しかし坊さんが、手を抜かず死者と向き合うことができれば、おそらく葬儀は変わっていく。

資料⑱

碑文谷創『お葬式』はなぜするの』（講談社＋α文庫 五五・五六頁）

僧侶がよりよいグリーンサポートを行うためにも、僧侶は檀信徒の同伴者にならなくてはならないと思う。

日常においてはよき相談相手として、死亡直後には駆けつけて枕経をあげて看取る。この枕経の時期というのは死亡直後であるから遺族は動揺している。その時、一緒にいて悲しみを分かつというのは重要な作業である。もつともこれは仏教の僧侶だけに求められることではない。

納棺のときも僧侶は立ち会う。納棺というのは死者を棺におさめるのだから、いわば死の事実確認という意味

もっている。納棺することによって遺族に死の事実を強制的に納得させるのである。

（中略）

禪宗の葬儀次第を見ると、昔は僧侶はこうやって死者や遺族に付き合ったのだろうか、ということがわかる。納棺、通夜、葬儀、火葬（埋葬）というプロセスにずっと僧侶は付き添っていた様子がうかがえる。

資料⑱

碑文谷創『お葬式』はなぜするの』（講談社＋α文庫 六九頁）

現在、葬儀の打ち合わせは僧侶（宗教者）抜きで葬儀社と遺族との間で行われることが一般化している。しかし、これに僧侶が加わるべきではないだろうか。

死亡直後の死者の枕辺で家族がそろって枕経を勤めた後、遺族の想い、本人の意思を聞き取る作業を行うことがとても大切である。

遺族の語る言葉に耳を傾けることだけでも重要である。そして遺族の想いを知って葬式を組み立てていく、これは葬儀社だけではできない。僧侶だけでもできない。遺族は自分たちの傍らに自分たちの想い、悲しみを理解してくれる人がいると感じられればいいのだ。

資料⑳

水谷修・大下大圓『手放してみる ゆだねてみる』（日本評論社 三九頁）

葬儀式を僧侶だけでやるのではなくて、式次第に「家族別れの言葉」を入れることによって、家族も参加してしまいます。葬儀とは、故人に向けて家族が最後に「いいたいこと、伝えたいこと」を表現する場だと思っからです。

資料⑱では資料⑧同様、リビング・ウイルを尊重することを求めているが、「現行の葬儀の中では、遺族が故人の

意思や生き方を受け止め、それを葬儀に反映させる場面がほとんど見当たらない」ことを指摘している。資料⑬では葬儀における坊さんの仕事は「葬儀の席で経を読み、引導を渡す」という短時間でベルトコンベアー式におこなわれていること、葬儀社に多くの事を依頼し楽をしていることを指摘している。この後、高橋氏は、初動段階から、枕経・納棺、葬儀という一連の流れのすべてにかかわることを求めている。実際、高橋氏の自坊、神宮寺では二四時間対応であり、真夜中でも伺うことや費用の明細化、納棺への立ち会い、葬儀のしおりの作成、葬儀式とお別れ会の二本立ての提案などが行われている。

資料⑭では僧侶がグリーンサポートを行うためには、檀信徒の同伴者になること、具体的には、日常においてよき相談相手となり、枕経に駆けつけ、遺族の想いを聴き、納棺のような苦しい場面に立ち会うことを求めている。

資料⑮は葬儀次第の中に遺族が想いを述べる機会を設けようとしたものである。資料⑯の「遺族が故人の意思や生き方を受け止め、それを葬儀に反映させる場面」を現行の葬儀の中で求めたものと言えよう。

六、おわりに

葬儀不要論は費用の高騰、個人主義、無縁化の問題等の関連であることが指摘されていたが、核家族の増加とも関連がある。社会性を重視する、社葬や大きな葬式すなわち三人称の死が減り、現在は遺族・故人という二人称・一人称の死が重視され、家族葬が増えてきたことは重要であろう。

この点は形式的なものではなく、オリジナルな葬儀を求めていく傾向がこれからも続いていくことを予見させる。葬式は続くが、葬式仏教が続くかは別と違ってよいかもしれない。

その中で葬式仏教が生き残る方法とは何であろうか。

寺院の経営・経済とも直結する問題であり、重要な問題であるが、会員制クラブを取ることも、ボランティア化す

することも現実問題難しいのではないだろうか。検討したように、説明責任を果たし、教師自らが立ち居振る舞いに気を遣うといったことが現実的な方法と考える。

一方で戒名問題は重要であろう。総じて世間は戒名に関してうさんくさいと感じているようであろう。戒名に関する説明はもちろんのことであるが、島田『戒名は、自分で決める』に書いてあるようなマニュアルやコンピューターなどで付けられた戒名では話にならないのではないだろうか。故人の人生を反映しつつ、経文・經典の意味を加味した戒名、その人らしい戒名でありながら仏教徒であることがわかる戒名を付け、説明することが僧侶には必要であろう。

自坊でも実践しているが、引導文の中に嘆徳文を入れることにして、その方の人生を教えてもらうのはどうだろうか。引導文を聴くだけで、その人の歴史、人となりに参加者が知ることになり、オリジナリティが出る。さらには直接聞き取りをすることで、遺族と向き合うこととなり、信頼を得やすくなる。さらに戒名作成の資料となり、少しかも知れないが、人と家族の思いを形にすることができる。

求められる葬儀に関しては、高橋卓志氏の神宮寺の活動、葬儀社任せにせず寺院が、葬式の最初から最後までかわかることで、精神的ケア・経済的ケア（低料金化）をはかることはすばらしいことではあるが、常設のスタッフが必要となり、小規模寺院では難しいと考えるのは私だけであろうか。（現実には神宮寺では、6人のスタッフがおり、二十四時間対応可能を実現している。）

この点、大下大圓氏の式次第に「家族別れの言葉」を入れることは各寺院でも可能なものであろう。僧侶とともに読経を行うことで傍観者ではなく、葬儀に参加させることも一つの方法であろう。高橋氏の指摘ではないが、私自身自坊では葬儀パンフレットをつくり、通夜のはじめにくばってもらい。式の前にこれから行う通夜・葬儀の説明を行っている。式後もパンフレットを用いたお話をすることが多い。

葬儀では前日の通夜の時、施主に自我偈写経を依頼し、多くの親族に書いてもらい。出棺時にそれで経を読み、棺に入れる事もしている。遺族にとっては大変であろうが、同時に故人への思い・成仏、霊山往詣への願いが入っていることになるのでやはりオリジナリテイが出てくるのではないだろうか。

葬儀そのものに関しては、碑文谷氏、高橋氏の指摘からも、枕経・納棺の重要性が指摘されている。アンケートやデータに現れないものであったとしても、家族と寄り添う姿勢が必要とされていると思われる。むしろ数値に表れない心の共有こそが葬式仏教を存続させる鍵となるのではないかと考えるのである。